

「日伯交流のために」 マルシア氏が日本祭りに出演決定 13/05/16 (9:07)

デビュー25周年を記念

日本で活躍する日系3世の歌手、マルシア氏（本名＝西家一枝マルシア）が県連（園田昭憲会長）主催の第16回フェスティバル・ド・ジャポン（日本祭り）で7月21、22両日に公演を行うことが決まった。かねてから「日系社会、日伯交流のために何かしたい」と願っていたというマルシア氏。今年は自身のデビュー25周年を迎える記念年でもあるだけに、とても盛り上がるステージになりそうだ。

マルシア氏は1969年、サンパウロ州モジ・ダス・クルーゼス市に生まれた。小さい時はポルトガル語しか話さず、「自分はブラジル人だという意識が強く、日系社会とはほとんどかわらず生活していた」というマルシア氏が日本文化との関係を持つようになったきっかけは、静岡県出身で1世の祖父、西家佐登里氏の存在だった。

ある日、佐登里氏の誘いで青年会のカラオケ大会に出場したマルシア氏は、佐登里氏の勧めたあみんの「待つわ」を熱唱して見事優勝。それから日本のカラオケに魅了され、さまざまなカラオケ大会に出場した。17歳の時には日本の歌謡テレビ番組出場の機会を得て初訪日。その際に作曲家・猪俣公章氏（故人）の目に留まり、89年には「ふりむけばヨコハマ」でCDデビューを飾ることとなった。

その後、時代劇鑑賞などで必死に日本語を覚えたというマルシア氏。現在では歌手としてのみならず、女優やタレントとしてもマルチな才能を発揮。デビューから25年目となる今もなお、日本の茶の間の人気者となっている。

「私は日系3世だが、約100年前から移民としてブラジルに渡った私たちの先祖が作り上げてくれたものがあったからこそ、今私たちがこうして平和に生きていられる」と先人たちへの思いを語るマルシア氏は、かねてから「日系社会、日伯交流のために何か私にできることがあるのなら、ぜひやらせていただきたい」と熱望していた。

そこで今回、「移り来て、日本移民105年と戦後60年」と副題を打った第16回日本祭りを、大いに盛り上げてくれる出演者を探していた県連がマルシア氏に白羽の矢を立てた。県連の園田会長も、「マルシアさんはブラジル生まれで、当地の日系人の間での知名度も高い。今年は日本移民としても、マルシアさんとしても節目の記念年であり、祭りに花を添えてくれるだろう」と太鼓判を押す。

第16回日本祭りでは、21、22両日正午から会場内特設ステージでマルシア氏が出演し、30分程度の歌謡ショーを予定しているという。入場者は観覧無料だ。

また、日本祭りのほかにもマルシア氏は「デビュー25周年・マルシアサンパウロ凱旋（がいせん）ツアー」と銘打ち、日系企業とタイアップした公演を行う予定だという。